## C—46 農村婦人作業衣の変遷（第9報）—— 防寒着について ——

県立秋田農業短大　　日浅治枝子

目的　農村婦人作業衣の一部として考えられる防寒着について報告する。防寒着の目的は，冬期農民が野外，屋内を問わず諸種の労働に際し，身体の保温を目的とするものである。今回は主として，躯幹部に着用する防寒着について，種類と名称，形態，材質，変遷及びその要因等を明らかにする一方，今後の農村社会ならびに農業技術の進展に適合する防寒性を持ち，さらに近代性を備えた防寒着を開発する。

方法　昭和27年以降，現在までに全国各地域の農山漁村約100余ケ所において，農村婦人作業衣の実態調査を行ってきたが，防寒着調査も同時に行ったものである。

結果　現在，農村各地域において着用される防寒着は，和，洋の二様式に分けられる。従来着用されてきた和式の防寒着は，袖のある「はんてん」類と，袖のない「袖なし」類に大別される。はんてんは，我が国の大半の地域に着用が見られ，その形態はあくみなしで，裾まで衿がつき，衿は折りかえさない。名称は各地によって異なり，もじり，むじり，ねじ袖，ねじりすっぽ，三角袖等よばれている。これは，はんてんの袖に巻き袖が多かったことによるもので，巻き袖の特徴ともいえる袖の下部を三角にねじって折ってあるところから，このようなよび名を生じたものであろう。また，袖口の形状から連想した，ぶたぐち，こいぐち，あるいはむきみやばんてんとよぶ地域もある。一方，袖なしは，ちゃんちゃんこ，はんちゃ，どうぎ，どんぶく等よばれ，布の至済と仕立方の簡便さ，着脱の便利さゆえに，全国各地にわたる分布が見られる。一部には俳風化され，今なお着用が盛である。